



否定と肯定

山下俊郎

文部省の保育要領の第三章、幼児の生活指導の中にはいろいろと幼児に接するもの考えなければならぬことが述べられているのであるが、その最後の「社会的発達について」の節に、

「いつも肯定的な言い方をしたい」という項がある。

どの子も明るい子どもに、そして積極的にピチ／＼した子どもに、ということを中心から願うわたくし達にとつて、この項は考えさせるものをたくさん持つていようである。

昨日も、学校から帰りの道で、可愛い幼児とその若いお母さんが一緒に歩いているのを見た。ところが、子どもが道にしゃがみ込んで「オンブ、オンブ」といつてきかない。お母さんは少々もてあまし気味である。

「そう！ あんよしなかつたら、キャンデー買つてあげ

ないから」

とおどかしている。

「あそこのお店の所まであんよしませしようよ。あんよしで行つたら、キャンデー買つてあげるわよ」

と言つてやつたら、小さい子どもの心に、歩こうという意欲がわいて来ないかしら。おんなじことをいつても、否定や打消しでいわれると、もらえないことの方が心に強くのしかかるのではないか。

水を入れた水差しをひとりの幼児が運んでいる。否定型のお母さんは子どもに向かつてこういうだろう。

「だめじやないの！ 気をつけなきや、水がこぼれるじやありませんか！」

幼児のお相手として物なれた幼稚園の先生は同じ子どもに對してこういうだろう。

「水差しをこういう風に（格好をして見せて）、しつかり持つて、ソロソロ歩いていらつしやいね」

否定型のお母さんのいうことは、まず第一に否定的である。漠然としている、どうしたらいいのかを教えない。ただ頭からだめじやないのと、どやしつけるだけである。

なれた幼稚園の先生は、どういう風にしたらいいかということをはつきりと限定的に積極的に指示している。

頭からどやしつけられただけでは、どうしたらいいか分らない。こぼれるじやないのといわれてもどうにもならない。こぼれるのは事実であつても、どうしたらいいかが子どもには分らないのである。子どもに対してものをいうときは、後の幼稚園の先生のように、積極的に、はつきりと、限定的に、そして子どもの気持ちを誘導するように、ものをいつてやりたい。

*

子どものいけない所、悪い所をひつぱり出して、だめじやないのといつて押えつけ否定してやることはいともやさしい。しかも、こうして否定にばかりかこまれている子どもは、つねに否定の重圧のものに在つて、ちじこまり、いじけて行くほかはない。

いい所を見つけ出して、これを積極的に誘導し、のばして行くことの方が大切である。その方がのび〜と明るく成長して行くことができる。

*

子どもに対しては、いつも肯定的な言い方をしたい。こう考えてくるとほんとにそちありたいものである。わたくし達は、つい否定で子どもをコントロールし勝ちになる。これは、わたくし達いまの大人の通有性かも知れない。わたくし達いまの大人は、いつも、「……てはいけませんよ」、「……を禁ず」という禁止命令のみに囲

まれて大きくなつて来たようなものである。このことが子どもに対しても同じように出て来るのかも知れない。

しかし、否定を使い勝ちだというわたくし達の通有性も、否定を使うことの方が事が簡単に運ぶからという所にも根ざしているだろう。ただし、事が簡単に運ぶというのは、単に見かけの上のことだけである。「いけない」ということをちよつと子ども達が止めただけのことである。この止めた裏に何が入り込んで来ているということを問題にしなれば、これで子どもがコントロールできたとということに、外見上はなつて来るのである。

*

子ども達の心を真直に、のび〜と積極的にのばして行く為には、何といつても肯定的ないい方が望ましい。しかし、それは単に、日常のいい方だけではない、子どもをめぐるあらゆるものに同じことが望まれる。

メンコがはやる。「いけません」、ベーゴマがはやる。「いけません」、よくない紙芝居がやつてくる。「いけません」、好ましくない歌がはやつている。「いけません」どちらを向いても「いけません」ばかりではないだろうか。

子どもたちを明るくのばしてやるために、積極的な、明るい、すぐれた文化財や施設がもつと生まれて欲しい。これも否定に代るよりよい肯定である。